小学校外国語教育の指導と評価

皇學館大学　文学部コミュニケーション学科　　川村　一代

はじめに

2020 年度は、新しいことをたくさん経験する年となりました。新型コロナウイルス感染症拡大防止のための長期臨時休校にはじまり、学校が再開されてからも、マスク着用で人と人との距離を取るなど「新しい生活様式」のもと、世の中が大きく変わりました。

そんな中、新学習指導要領が全面実施され、小学校英語教育も大きく変わりました。新体制一年目は制約の多い一年でしたが、昨年度に引き続き、公開授業やそれに向けての授業研究に取り組まれた津市立南立誠小学校の先生方に、敬意を表したいと思います。

１．外国語活動と外国語

今年度から、３・４年生対象の「外国語活動」と５・６年生対象の教科「外国語」がスタートしました。「外国語活動」と「外国語」の違いをまとめたものが以下の表です。

	外国語活動	外国語科
区分	教科外の教育活動	教科
対象	3･4年生	5･6年生
授業時数	年間35単位時間	年間70単位時間
扱う領域	聞くこと、話すこと	聞くこと、話すこと 読むこと、書くこと
学習指導要領の目標の記述	○○するようにする	○○できるようにする
目的	慣れ親しみ できるようになることを第一の目的としないが、結果としてできるようになるとよい	定着 できるようになることを第一の目的とする
教材	文科省補助教材 Let's Try! 1, 2	各自治体が採択した教科書
評価	観点別評価	
	文章による記述	三段階の評定

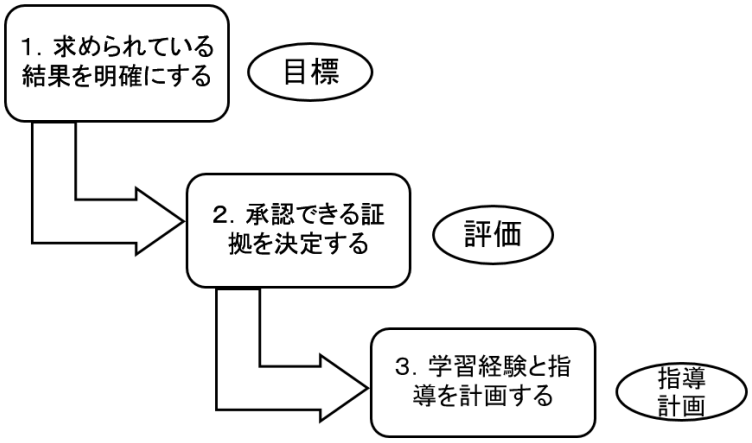
図1．外国語活動と外国語科の違い

様々な違いがありますが、太線で囲ってある「学習指導要領の目標の記述」と「目的」に注目してみましょう。「目的」とは、最終的に狙う的です。的に達する途中の標（しるべ）となるのが「目標」です。『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説』の付録６に「『外国語活動・外国語の目標』の学校段階別一覧表」が掲載されています。「５つの領域別の目標」を見ると、「外国語活動」の目標の文末は「～するようにする」、「外国語」は「～できるようにする」と記述されています。つまり、５・６年生では「英語

を使って○○できる」具体を増やしながら、語句や表現の定着を図り、「コミュニケーションを図る基礎」を、３・４年生では「英語で○○する」ことを通して英語に慣れ親しみ、「コミュニケーションを図る素地」を養います。「外国語」の「定着」とは、単なる暗記ではなく、「実際のコミュニケーションの場で、目的・場面・状況に応じた語句や表現が使えるようになる」ことを指します。

２.「逆向き設計」論[注1]を活用した授業づくり

「英語を使って○○できること」を確実に増やしていくために、「逆向き設計」論を活用した授業づくりが効果的と考えます。「逆向き設計」論を外国語の授業づくりに当てはめると、①英語を使ってできるようになることを目標（評価規準）として設定し、②目標が達成されたかをどう判断するのか（評価基準）を決め、③目標達成へ向かっての指導計画を立てる、となります（図２）。以下で、公開授業で扱われた NEW HORIZON Elementary 6 の Unit 8 My Future, My Dream を例に、「逆向き設計」論を活用した授業づくりを見ていきましょう（図３）。なお、この単元の内容は、各社の教科書で扱われています。



G. Wiggins & J. McTighe (2005). UNDERSTANDING by DESIGN., Expanded 2nd Edition. Association for Supervision and Curriculum Development (ASCD).〔G. ウィギンズ、J. マクタイ（西岡加名恵訳）『理解をもたらすカリキュラム設計　―「逆向き設計」の理論と方法』日本標準．2012年〕図表1-1. UbD：「逆向き設計」の３段階（p22）をもとに作成

図2.「逆向き設計」の3段階

①求められている結果を明確にする（目標設定）

Unit 8 の目標（Our Goal）は「中学校生活や将来について考え、夢を発表しよう」と教科書に記載されています。単元目標は、どの教科書にも記載されていますので、それを参考に、目標を設定します。単元の終末に、児童に英語を使ってどのようなことができるようになっていてほしいか、目指す姿を児童にわかりやすい簡単な文で記述します。この単元の場合、「中学校生活や将来の夢を発表しよう」とすることにします。

②承認できる証拠を決定する（評価基準設定）

Unit 8 の目標は「中学校生活や将来の夢を発表しよう」と決まりましたが、これでは具体的にどのような英語を使えばよいのかがわかりません。そこで、目標の内容を表現する具体的な英語（最終形）を設定します。本単元では、中学校生活について「入りたいクラブ」「楽しみたい行事」、将来の夢について「得意なこと」「将来就きたい職業」が発表できることを目指し、それらを表現する“I want to join ~. I want to enjoy ~. I am good at ~. I want to be ~.”という英語を最終形として設定します。最終形の英語は教科書に記載されていますので、それを参考に、目の前の児童に合わせて各学校でアレンジするとよいでしょう。単元末の発表で最終形が使えていれば B 評価となります。授業では、全員が最終形を使えるようになるよう指導をします。

③学習経験と指導を計画する

単元目標（大きな目標）と評価基準が決まったら、毎時間の目標（小さな目標）を設定します。大きな目標を達成するには、各時間何ができるようになる必要があるのか、そのためにはどんな活動をすべきかを考えます。指導者がねらいを持って授業を行えば、児童はそれに応えてくれます。小さな目標を積み重ねていくことにより、大きな目標が達成できます。大きな目標を達成して「英語で〇〇できること」を積み重ね、「外国語」の目的である「実際のコミュニケーションの場で、目的・場面・状況に応じた語句や表現が使えるようになること」を目指します。

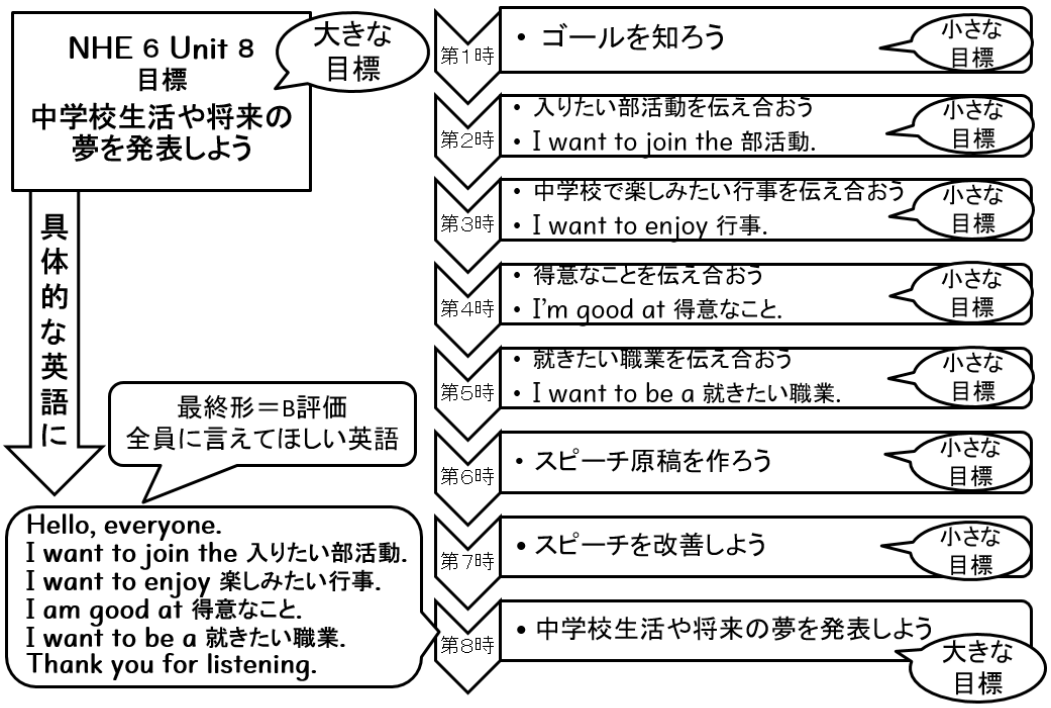


図３．目標・評価・単元計画

注１：ウィギンズとマクタイが提唱する「逆向き設計」論では、リアルな文脈の中で知識やスキルを応用・総合しつつ使いこなすことを求めるような課題（西岡、2008）である「パフォーマンス課題」をカリキュラムに位置づけることが提唱されているため、「英語を使って〇〇できるようになる」ことを目標とする外国語の授業は、「逆向き設計」論と親和性が高いと考えます。「逆向き設計」論では、①「求められている結果を明確にする」、②「承認できる証拠を決定する」、③「学習経験と指導を計画する」という３段階を経てカリキュラムや単元を設計します（図２参照）。教育によって最終的にもたらされる結果から遡って教育を設計する点、また通常、指導が行われた後で考えられがちな評価を先に構想する点から「逆向き」と呼ばれています（西岡、2005）。

３．ICT の活用[注2]

南立誠小学校では、今年度２学期より、外国語の授業にタブレット端末を取り入れました。公開授業では、児童がペアになり、お互いの発表をタブレット端末で撮影し合っていました（写真１）。児童は、パートナーに撮影してもらった自分の発表動画を見て（写真２）、発表の改善を図りました。改善点を見出した児童は、「もう一回撮って」とパートナーに頼み、自らの学習を調整して主体的に学ぶ姿が見られました。

写真１：パートナーの発表を撮影する様子　写真２：撮影された動画を振り返る様子

「話すこと（発表）」に関するタブレット端末の活用としては、写真など画像を用いて発表資料を作成することもできるでしょう。発表資料の作成に絵を描かせると、時間がかかったり、上手下手が生じたりしますが、タブレット端末を用いれば、そういった問題が解消できます。また、発表の動画を記録してポートフォリオにしていくと、児童が自らの成長を確認できるだけでなく、保護者への報告にも使えます。中学校の先生と共有すれば、小学校でどのようなことがどの程度できるようになっているか情報提供ができます。

小学校英語の授業では、ICT を、①提示ツール、②発表ツール、③記録ツール、④通

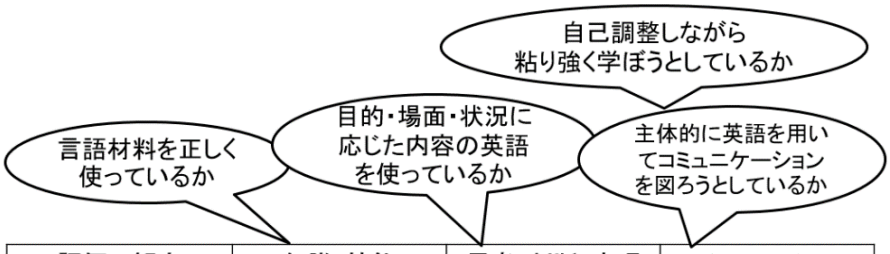
信ツール、⑤共有ツールとして活用できます（東口、2020）。今回の授業では、「記録ツール」として活用しました。三重県教育委員会令和２年度研修講座【K0920】（ネット DE 研修）では、「外国語教育における ICT 活用研修　－小学校英語－」を扱っています。令和２年度は２月 26 日まで配信していましたが、令和３年度も配信の予定です。ご覧いただければと思います。

注２：新型コロナウイルスの影響で、GIGA スクール構想が前倒しされ、2021 年度から、一人一台端末を活用した授業が本格的に行われます。GIGA スクール構想とは、児童生徒に、より充実した学びを提供するため、学校に高速大容量の通信ネットワーク環境を整備し、児童生徒全員に一人一台の端末を配備する計画のことです。『小学校学習指導要領（29 年告示）外国語活動・外国語』には「児童が身に付けるべき資質・能力や児童の実態、教材の内容などに応じて、視聴覚教材やコンピュータ、情報通信ネットワーク、教育機器などを有効活用し、児童の興味・関心をより高め、指導の効率化や言語活動の更なる充実を図るようにすること」と書かれています。ICT 活用は、児童の学びをより豊かにするものであることはもちろん、先生方にとっても指導の効率化が図れるものなのです。

４．評価について

文部科学省国立教育政策研究所の『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料　小学校　外国語・外国語活動』では、評価を、「記録に残す評価」と記録に残さない、「児童の学習改善」「教師の指導改善」につながる評価に分けています。

「記録に残す評価」は、外国語の場合、３つの観点（知識・技能、思考・判断・表現、主体的に学習に取り組む態度）と５つの領域（聞くこと、読むこと、話すこと〔やり取り〕、話すこと〔発表〕、書くこと）を掛け合わせた 15 の観点で評価します（図 4）。



評価の観点	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
聞くこと			
読むこと			
話すこと（やり取り）			
話すこと（発表）			
書くこと			

図４．外国語の評価

この 15 の観点は、１単元で見取るのではなく、複数の単元に亘り、学年を通して見取ります。公開授業で扱われた単元では、「話すこと（発表）」と「書くこと」を「記録に残す評価」として評価していました。

外国語における「知識・技能」は言語材料（英語）を正しく使っているかを見ます。小学校では、文構造（語順）は評価しますが、複数形の s などの文法は評価対象とはなりません。「思考・判断・表現」では、目的・場面・状況に応じて、その場に合った内容の英語を使っているかを見ます。従って、「思考・判断・表現」を評価するには、目的や場面、状況がある中で言語活動を行う必要があります。「主体的に学習に取り組む態度」は、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとしているかを評価しますので、「主体的に学習に取り組む態度」と「思考・判断・表現」は一体的に見取ることができます。「主体的に学習に取り組む態度」は、粘り強く取り組んでいるだけでなく、自分で自分の学習状況を客観的に把握し、自己調整を図りながら取り組んでいるかどうかでも評価します。

おわりに

今年度から、従来の「外国語活動」に加えて教科「外国語」が始まり、小学校英語は新しい時代を迎えました。教科書が導入され、「読む」「書く」活動が入り、評価方法が変わりましたが、「音声」「意味」「活動」を重視することに変わりはありません。音声中心に、意味のある活動の中で、実際に英語を使って、英語でできることを蓄積していきます。

外国語学習は、アメリカの哲学者 Dewey（デューイ）のいう、Learning by Doing（やりながら学ぶ）精神が大切です。児童も指導者も、授業の中で英語をたくさん使って、英語でできることを増やしていき、実際のコミュニケーションの場で、英語を用いてコミュニケーションを図る力をつけていきましょう。

引用文献

西岡加名恵（2005）.「ウィギンズとマクタイによる「逆向き設計」論の意義と課題」『カリキュラム研究』第 14 号，15-29.

西岡加名恵編著（2008）.『「逆向き設計」で確かな学力を保障する』明治図書出版.

東口貴彰（2020）.『小学校英語×ICT「楽しい」を聞きだす活動アイデア 60』明治図書出版.